

コンサートホールの今

宮下 博

今年度読響は、サントリーホール、東京芸術劇場、横浜みなとみらいホール、よみうり大手町ホール、パルテノン多摩、フェスティバルホール（大阪）でシリーズ公演を展開する。この6月は、六つの会場すべてでコンサートが開かれる。これを機に、コンサートホールの歴史を簡単におさらいし、各会場の最近の話題をまとめてお届けしよう。

靴箱型とぶどう畑型

18世紀まで王侯貴族や教会の庇護のもとで発展したクラシック音楽は、ヨーロッパを席卷した市民革命を経て19世紀に入ると、経済力や教養を身につけた市民層へ広まっていった。これに伴いコンサートを開く会場も、宮廷のサロンなどから、多くの人々に開かれ同時に音楽を聴ける広いホールへ変わっていった。

1870年に完成したウィーン楽友協会大ホールが好例だ。靴箱のような長



ウィーン楽友協会 ©Gryffindor

方形の構造から「シューボックス型」といわれる。同ホールを含め、世界の3大コンサートホールに数えられるアムステルダム・コンセルトヘボウ（1888年完成）、米ボストンのシンフォニー・ホール（1900年完成）は、いずれもこの形を採る。

シューボックス型は一般に横幅が狭く天井が高いため、反射音が豊富でリッチな響きを得やすいとされる。読響がシリーズを持つ会場では、横浜みなとみらいホールが、この型をベースに舞台が見やすいアリーナ型の客席配置とした「囲み型シューボックス形式」にあたる。読響の《みなとみらいホリデー名曲シリーズ》は、同ホールにふさわしい華やかなプログラムを用意している。

戦後、音響技術が発達し、音を物理的にコントロールできるようになると、斬新な形状のホールが現れた。その代



「囲み型シューボックス形式」の横浜みなとみらいホール

表が1963年にオープンしたベルリンのフィルハーモニー・ホールだ。ハンス・シャロウンが設計した同ホールは指揮者を中心に、舞台を取り囲むように客席が配置され、段状になったぶどう畑を思わせるので「ワインヤード型」と呼ばれる。読響は昨年3月の欧州公演初日を、この名門ホールで飾った。

ワインヤード型の利点には、客席数を増やしやすきことや、席の位置による音の差が小さいことがある。音質も解像度がよく、響きがクリアに聞こえやすいという。日本では東京のサントリーホールが、この方式の先駆けだ。カラヤンの意見も採り入れて設計され、1986年のオープン以後、国内の現代的なコンサートホールの“ものさし”となった。今では来日アーティストからも使いたいと熱望する声が増え、世界中に評判がとどろく。読響は《定期演奏会》と《名曲シリーズ》を開いている。

大規模な定期改修

コンサートホールも建築物である以上、経年変化によって傷みが生じる。毎晩コンサートを開きながら補修を続けるのには限度があるため、一定の周期で長期間、営業を閉じて、大規模な修理をしなければならない。

サントリーホールは約10年おきに大規模改修を行ってきた。今年の10月に開館30周年を祝った後、2017年2月6日から8月31日までの約7か月間、休館して、大掛かりな修繕に入る。読響はクローズ直前の同年1月31日に、今シーズン最後の定期演奏会を常任指揮者カンブルランのタクトで行う。

改修ではユニバーサル・デザイン（誰にでも使いやすい設計）への対応を広げ、2階の客席へ正面玄関側から上られるエレベーターの新設や、女性用トイレの増設を計画。一方、音響特性は変わらないよう配慮し、例えば座席の



休館して大がかりな修繕に入るサントリーホール

張り替え布地は現在と同じ特別なオーストリア製のものを注文したという。

「日本をリードするホールとして守るべき点は継承しながら進化させます。30年という歴史は国内では長くても、世界ではまだ短い。定評に恥じないホールにしていきます」(越野多門・広報部長)と意気込む。

音響や高齢者対策に工夫も



東京芸術劇場の音響反射板

読響が《土曜／日曜マチネーシリーズ》を開き、事業提携の関係にある東京芸術劇場(池袋)は、2011年4月から12年8月にかけて大きな改修工事を行った。このリニューアルによって同劇場のコンサートホールは、「響きが豊かになって音に木質の温度感が加わった」などと、聴衆や奏者の評価が急上昇した。

その秘密は「四つの改善点にあります」と、同劇場管理課で音響技術を担当する石丸耕一係長が語る。まず舞台や客席の壁面に並

ぶ、縦のリブが目立つ音響反射板。「これによって最初の反射音が広く拡散し、豊潤な響きを感じられるようになります」(石丸係長)。また、ステージを客席側に約90cm延ばし、天井反射板を約3m下げたことで、舞台からの直接音が客席に届きやすくなったり、舞台上への音のはね返りが増したり、といった効果が生まれた。舞台の床をヒノキ材に変えたことも、温かい響きに寄与しているという。

「ホールも“楽器”であることを強調して、丁寧に工事をしてもらいました。ヒノキ材の湿度管理に加湿器を置くなど、楽器と同様にホールを大切に育てています」(同)と、お守役の愛情は深い。

読響が今シーズンから《パルテノン名曲シリーズ》を共催で始めたパルテノン多摩(東京都多摩市)も、2018～19年度に大規模な修繕を計画 중이다。多摩ニュータウンの中核的な文化施設として1987年にオープンしたが、築30年を前に各部の老朽化も目立ってきた。今年度に基本計画・設計を行っ



築30年が迫るパルテノン多摩

た後、改修に入る方針だ。

空調や配管、外壁などの基本構造に加え、車イス用スペースの抜本的な改善や段差の解消など、バリア・フリー対策にも本腰を入れる。「30年前と街の人口構成が変わり高齢者が増えたので、ホールの利用者層も変わりました。街のシンボルである以上、時代の要請に応えるのは当然です」と、ホールを運営する多摩市文化振興財団の垣内敬太・総務管理課長は話す。

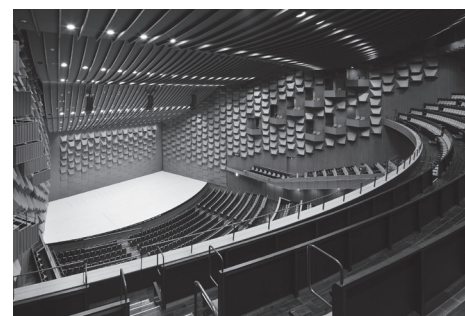
新聞社ビルの新ホール

東京の読売新聞ビルで2014年3月にオープンしたよみうり大手町ホールと、大阪の中之島フェスティバルタワーで2013年4月に開業したフェスティバルホールはそれぞれ、新聞社のビルに同居する新しいホールだ。読響は、前者で《読響アンサンブル・シリーズ》を開き、後者は今シーズンから《大阪定期演奏会》を開催する。

よみうり大手町ホール(501席)は読売新聞ビルの4、5階に位置し、コンサートから試写会、シンポジウムまで対応できる。2014年にラ・フォル・ジュルネ・オ・ジャポン「熱狂の日」音楽祭の会場となるなど、優れた音響の評判は上々だ。地下鉄大手町駅に直結という地の利もあって、《読響アンサン



よみうり大手町ホールは501席の小規模会場



2目目のフェスティバルホール(3階席から)

ブル・シリーズ》はチケット完売が続いている。

フェスティバルホール(2700席)が収まる中之島フェスティバルタワーの9～12階には、朝日新聞大阪本社がある。1958年に開館した初代ホールは、大阪国際フェスティバルの会場としても知られた。舞台入り口には2008年に閉じた初代ホールの古い舞台床材(ヒノキの無垢材)が敷かれ、新ホールの舞台に立つ者はみな長い伝統を踏みしめて歴史に連なるのだ、と意識させるところが老舗らしい。読響の《大阪定期演奏会》では、大編成が映えるプログラムを満喫していただきたい。

(みやした ひろし/読響事務局)

亀山郁夫 — ②

Ikuo Kameyama

「永遠なるもの」への憧れ

マーラー：交響曲 第3番



私は30歳から39歳までの10年間、ほとんどマニアックと言っていらいマーラーを聴き込んでいました。きっかけは関西の私立大学で助手になり、ロシア・アバンギャルド（1917年の革命前後に最盛期を迎えたロシアの前衛芸術運動）の研究を始めた頃でした。

それまでは何と言ってもブラームスが好きだった。学生時代に東京外国語大学のオーケストラでチェロを弾いていたのですが、当時、マーラーはよくわからなかった。オーケストラ仲間がどんなにすごいと言っても、「これが音楽？」という印象で。しかし30歳になった時、「自分は20世紀芸術が専門なのに、いつまでもブラームスばかり聴いてはいけない」と思ってマーラーを意識的に聴き始めたのです。

趣味のパチンコで稼いだお金で最初に買ったのが、クーベリック指揮バイエルン放送響の「第4番」の廉価盤LP。擦り切れるまで何度も何度も聴きまし

た。第1楽章の冒頭、リズムを刻んできた音楽がふっとメロディーに変わる瞬間、「あっ、これはすごい！」と思った。

そこからはもう一直線にはまりました。あらゆるレコードを買いあさり、FM番組をチェックして全部カセットテープに録りました。

中でも「第3番」は特別です。作曲者いわく、ここには「自然の声」が描かれている。30分を超える第1楽章で聴けるのは単なる自然描写ではなく、自然の神秘、崇高さが独創的な方法で表現されています。それはまさに音楽が持つサブライム（崇高）な感覚です。ブラームスのような様式美、シンフォニーの伝統からは逸脱していますが、ここには宇宙的なビジョンがある。混沌、茫^{ぼう}洋^{よう}としていて最初はとらえどころがないけれど、聴き続けているとある瞬間、音楽そのものを超越した「永遠なるもの」が出現する。本当に不思議な感覚です。

この作品から受ける感覚は何かに似

ている——そう、ドストエフスキーの長編『カラマーゾフの兄弟』に出てくるゾシマ長老の自然観です。これは私の個人的な受け止め方ですが、マーラーの中にはどこか論理を超越した純粹さに憧れる非西欧的な感性が潜んでいると思います。この曲の第1楽章から第6楽章に至る長大な物語はニーチェの思想に影響を受けていると言われますが、第1楽章にはそのニーチェの「ディオニュソス的なもの」、理性に抗^{あらが}って私たちの感情を呼び起こす激情と陶酔を聞き取ることができる。同時に人間の傲慢さを諷^{いさ}め、自然に対する信仰と愛を説くゾシマ長老の精神との類似を見るのです。マーラーはドストエフスキーを愛読していたといいます。

振り返ると30代の頃の私は、マーラーの音楽にロマンチックに陶酔し、作品と自己を同一化していたかもしれません。「第3番」の実演に初めて接したのは1986年2月、小澤征爾指揮ボストン響の京都公演でした。京都会館の客席に座り、確かに音楽を聴いた。でもその時、自分自身の内ではマーラーに対する熱狂は終わりかけていました。

ちょうどその頃、私はロシア・アバンギャルドからスターリン時代の文化・芸術へと研究テーマを変えました。無慈悲な政治権力に良心をもって抵抗した芸術家たちの生涯を調べるうち、自分自身への幻想が消え、あの壮大な



グスタフ・マーラー（1907年）

ビジョンに素直に自己投入できなくなった。10年間かけてマーラーを聴き尽くし、味わい尽くした結果、内なる批評精神がマーラーの作品世界を相対化してしまったのです。

最近、久しぶりにアバド指揮ルツェルン祝祭管のDVDを観ました。アバドが晩年に到達した純粹な心境、その響きの見事な構築性に驚嘆しつつ、「こんなに集中してこの曲を聴くのは、これが生涯最後になるかもしれないな」と思いながら。すべての熱狂はいつか終わるのです。（聞き手・事務局）

profile かめやま・いくお

1949年栃木県生まれ。名古屋外国語大学長。音楽、美術を含むロシア文化・文学研究の第一人者。翻訳したドストエフスキー『カラマーゾフの兄弟』はベストセラーに。2013年『謎解き「悪霊」』で読売文学賞受賞。著書・訳書多数。

◎首席フルート奏者

倉田 優

Yu Kurata

木管の音の溶け合う瞬間に
幸せを感じます

《今月のプログラムは、常任指揮者カ
ンブルラン指揮のブルックナーの交響
曲第3番〈ワグナー〉をはじめ、難
曲ぞろいですね》

ブルックナーはとても楽しみです。
カンブルランさんは和やかな雰囲気な
がらも、常に私たちと適切な距離感を
保ちつつ、色彩感にあふれ、流れのい
い音楽を作っています。

今回の第3番はフルートも活躍しま
す。ブルックナーの作品では、フルー
トには厄介な音を使った美しいフレー
ズがたくさん出てきます。シンプルで
内面的な深い表現が求められます。木
管のユニゾンも多く、互いに音色やニ
ュアンスを合わせるところが難しい
し、面白いです。魅力を感じるのは、
オーボエの色が強いとか、フルートが
目立ち過ぎるとかではなく、木管セク
ションが一つの楽器の音色を作るよう
にブレンドすることです。何の楽器が
混ざっているのか分からないほどま
く溶け合った時、幸せを感じます。

ブルックナーと言えば、1月にスク
ロヴァチェフスキさんの指揮で第8番
を演奏しましたが、最後涙が止まらな
くなりました。本番でこんなことは人
生初体験です。16年前に亡くなった
弟の命日が公演日の前日だったことも
あったのですが、音楽の持つパワーを
実感しました。

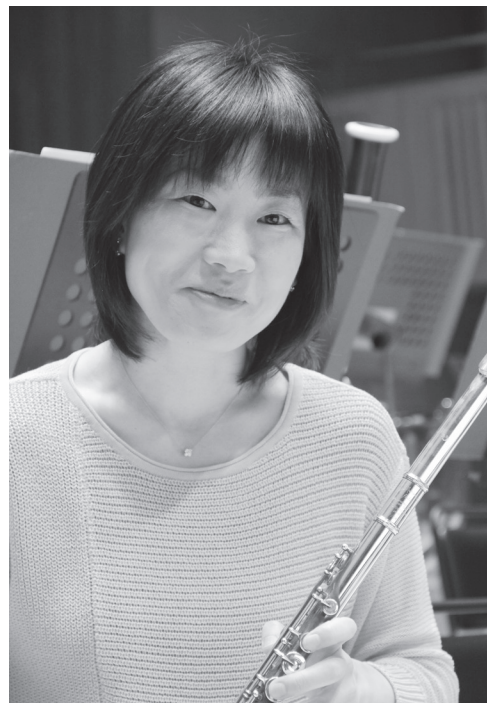
ストラヴィンスキーのバレエ音楽
〈火の鳥〉では、火の鳥の踊りの場面
でフルートが活躍します。テンポが速
くて指使いも厳しい。ブルックナーと
は正反対の難しさのある名曲です。

《倉田さんは京都出身。4歳からピア
ノを学び、小6でフルートと出会う》

南禅寺や哲学の道がそばにある、素
晴らしい環境で育ちました。中学への
進学前、母と相談してプロの音楽家を
目指すことを決めたのですが、ピアノ
の先生から「あなたはピアノではプロ
にはなれない、管楽器ならまだ間に合
う」と言われ、フルートを選びました。
個人練習ができず、週末もレッスンに
通えなくなるので、学校の吹奏楽部に
は入らなかったのですよ。

《桐朋学園大を2年で中退し、英国
に留学。大幅に吹き方（奏法）を変え
たという》

最初の2年間は、英国の田舎の少人



数スクールでした。人より羊のほうが
多いような大自然の中、缶詰め状態で
フルートに集中しましたね。先生か
ら、「あなたの音はきれいだけど、細
くて飛んでこない」と指摘され、音を
太くして遠くに飛ばす奏法を教わりま
した。先生は金製の楽器が嫌いで、古
い銀製の楽器が好きでした。レッス
ンの休憩時間に、私の大切な金の楽器が
ゴミ箱に捨てられていたこともあった
ほどです（笑）。その後の1年間は、英
国王立音楽院に進み、さらに音に表情
をつけることやフレーズの作り方を学
びました。今は銀の楽器を使っていま
す。金と銀ではやはり音色が随分違
うんです。

《日本木管コンクール1位、日本
音楽コンクール2位など、コンク
ール歴は華々しい。読響に首席フ
ルート奏者として入団したのは
28歳の時だった》

入団当初は何もできず大変でし
た。主にソロの勉強をしていて、
室内楽やオーケストラを学ぶ機会
がないまま留学し、英国でも他の
楽器とアンサンブルをする機会が
あまりなかったからです。とても
恥ずかしい話ですが、入団してから
周りの先輩方に、本当に多くの
ことを教えていただきました。い
つも心から感謝しています。最近
は、体のストレッチや気分の切り
替えなどコンディション作りにも
とても気を配るようになりました。

《オーケストラでフルートを演奏する
楽しみは？》

普段から意識しているのは、様々な
音色と表情を作ることです。例えば、
一晩で3曲演奏する時には一人3役演
じるようなイメージで吹いています。
私はオーケストラの軸は低弦、オーボ
エ、ホルンにあると考えているんです
よ。そこにフルートがお化粧する。フ
ルートで表現力豊かな演奏ができれば、
オーケストラの魅力に繋がると考
えていますし、それをお客様に感じて
いただけた時の幸せが、私のフルート
を吹く楽しみでもあります。

ウィーン放送響率いる新鋭マイスターが振る〈悲劇的〉

7/14 (木) 19:00 第560回 定期演奏会
サントリーホール

ハイドン：交響曲 第6番〈朝〉

マーラー：交響曲 第6番〈悲劇的〉

指揮：コルネリウス・マイスター



コルネリウス・
マイスター

欧州で活躍する二人の実力派が贈る《直球プログラム》

7/18 (月祝) 14:00 第90回 みなとみらいホリデー名曲シリーズ
横浜みなとみらいホール

7/19 (火) 19:00 第594回 名曲シリーズ
サントリーホール

ベートーヴェン：ヴァイオリン協奏曲

ブラームス：交響曲 第2番

指揮：コルネリウス・マイスター

ヴァイオリン：バイバ・スクリデ



コルネリウス・
マイスター



バイバ・スクリデ

俊英リープライヒの〈運命〉× 期待の新星・牛田のショパン

7/23 (土) 14:00 第189回 土曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール

7/24 (日) 14:00 第189回 日曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール

メンデルスゾーン：序曲〈フィンガルの洞窟〉

ショパン：ピアノ協奏曲 第2番

ベートーヴェン：交響曲 第5番〈運命〉

指揮：アレクサンダー・リープライヒ

ピアノ：牛田智大



アレクサンダー・
リープライヒ



牛田智大

7月 公演の聴きどころ

7月はウィーン放送響首席指揮者を務める36歳の新鋭、コルネリウス・マイスターが約2年ぶりに登場する。2014年秋にR. シュトラウスの〈アルプス交響曲〉などで鮮烈な読響デビューを飾ったマイスターが、14日の《定期》ではハイドンの交響曲第6番〈朝〉とマーラーの交響曲第6番〈悲劇的〉で腕をふるう。小編成で明るい曲調を持つ〈朝〉と、対照的な大編成で複雑にモチーフが絡み合う〈悲劇的〉の2曲が並ぶ興味深いプログラムだ。〈悲劇的〉は、古典的な4楽章形式を取りながらも管弦楽の編成は大きく、打楽器が多用される。とりわけ、第4楽章で使用されるハンマーの打撃は象徴的だ。構成や楽器の用法などで大胆さを見せるこの壮大な交響曲で、マイスターがどのような解釈を繰り広げるのか、興味がつきない。

18日の《みなとみらいホリデー名曲シリーズ》、19日の《名曲シリーズ》ではマイスターが、ドイツを代表する作曲家二人の人気のプログラムで、“ドイツ音楽の神髄”を体現する。牧歌的な雰囲気^{あふ}に溢れ、しばしばブラームスの「田園交響曲」と例えられる交響曲第2番では、美しく開放的な風景を思い起こさせてくれるだろう。ベートーヴェンのヴァイオリン協奏曲では、ラトヴィア出身の新鋭バイバ・スクリデが共演。エリザベート王妃国際コンクール優勝後、ベルリン・フィル、パリ管など世界の一流楽団と共演し活躍する本格派が、透明感のある音色を駆使する。

23、24日の《マチネーシリーズ》は、ポーランド国立放送響の芸術監督を務め、ロイヤル・コンサートヘボウ管などに客演する俊英アレクサンダー・リープライヒが、ベートーヴェンの〈運命〉で読響と初共演。言わずと知れた名曲をどのように聴かせてくれるのか楽しみだ。前半は、16歳のヤング・スター牛田智大がショパンのピアノ協奏曲第2番を披露する。幼少時から国際コンクールで賞を受け、様々なオーケストラと共演する牛田が初々しい感性を発揮して、ロマンティックな詩情に満ち溢れるショパンは聴き逃せない。

(文責：事務局)

読響チケットWEB

検索

フランクフルト歌劇場音楽総監督のヴァイグレが読響初登場!

8/17 (水) 19:00 第595回 名曲シリーズ
サントリーホール

メンデルスゾーン：序曲〈レイ・ブラス〉
シューマン：交響曲 第4番
ドヴォルザーク：交響曲 第8番
指揮：セバスティアン・ヴァイグレ

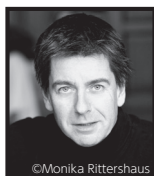


セバスティアン・
ヴァイグレ

オペラを得意とする名匠が振る R. シュトラウス・プログラム

8/23 (火) 19:00 第561回 定期演奏会
サントリーホール

R. シュトラウス：交響詩〈ティル・オイレンシュピーゲルの愉快な
いたずら〉
R. シュトラウス：4つの最後の歌
R. シュトラウス：家庭交響曲
指揮：セバスティアン・ヴァイグレ
ソプラノ：エルザ・ファン・デン・ヘーヴァー



セバスティアン・
ヴァイグレ



エルザ・ファン・
デン・ヘーヴァー

ウィーン・フィル首席の D. オッテンザマーが妙技を披露

8/27 (土) 14:00 第190回 土曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール

8/28 (日) 14:00 第190回 日曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール

ウェーバー：歌劇〈魔弾の射手〉序曲
モーツァルト：クラリネット協奏曲
ブラームス：交響曲 第1番
指揮：セバスティアン・ヴァイグレ
クラリネット：ダニエル・オッテンザマー



セバスティアン・
ヴァイグレ



ダニエル・
オッテンザマー

お申し込み・
お問い合わせ

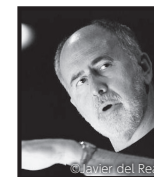
読響チケットセンター 0570-00-4390
(10:00~18:00/年中無休)

ホームページアドレス <http://yomikyo.or.jp/>

二人の巨匠が魅せる《極上のスペイン音楽》

9/16 (金) 19:00 第596回 名曲シリーズ
サントリーホール

シャブリエ：狂詩曲〈スペイン〉
ファリャ：交響的印象〈スペインの庭の夜〉
アルベニス：〈イベリア〉から
トゥリーナ：交響詩〈幻想舞曲集〉
指揮：ヘスス・ロペス＝コボス
ピアノ：ホアキン・アチュカロ



ヘスス・
ロペス＝コボス

コンサートマスター長原幸太らが繰り広げる白熱の室内楽

9/20 (火) 19:30 第11回 読響アンサンブル・シリーズ
よみうり大手町ホール ※19:00から解説 **完売**

《長原幸太ら読響メンバーの室内楽》
モーツァルト：ディヴェルティメント 変ホ長調 K.563
ベートーヴェン：交響曲 第7番(弦楽五重奏版)
ヴァイオリン：長原幸太(コンサートマスター)、瀧村依里(首席)
ヴィオラ：鈴木康浩(ソロ・ヴィオラ)、柳瀬省太(ソロ・ヴィオラ)
チェロ：高木慶太(首席代行)



長原幸太

ロジェストヴェンスキーが十八番の傑作バレエを指揮

9/24 (土) 14:00 第191回 土曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール

9/25 (日) 14:00 第191回 日曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール

《チャイコフスキー／三大バレエ名曲選》
チャイコフスキー：〈白鳥の湖〉、〈眠りの森の美女〉、
〈くるみ割り人形〉から

指揮：ゲンナジー・ロジェストヴェンスキー(名誉指揮者)



ゲンナジー・
ロジェストヴェンスキー

ロシアの重鎮がショスタコーヴィチ作品で渾身のタクト!

9/26 (月) 19:00 第562回 定期演奏会
サントリーホール

ショスタコーヴィチ：バレエ組曲〈黄金時代〉、ピアノ協奏曲 第1番、
交響曲 第10番

指揮：ゲンナジー・ロジェストヴェンスキー(名誉指揮者)
ピアノ：ヴィクトリア・ポストニコワ



ゲンナジー・
ロジェストヴェンスキー

日本テレビ「読響シンフォニックライブ」 公開収録

■ 7/5 (火) 19:00 東京芸術劇場コンサートホール

指揮：本名徹次

ユーフォニアム：^{ほかぞの}外園祥一郎

語り：溝端淳平

和田信／シャローム(金管6重奏)

マルセル・ケンツビッチ／ユーフォニアム協奏曲〈皇帝〉

チャイコフスキー／バレエ音楽〈白鳥の湖〉(抜粋／語り付き)

ラヴェル／ボレロ

[お問い合わせ・詳細]「読響シンフォニックライブ」ホームページ

<http://www.ntv.co.jp/yomikyo>

※ 本公演の応募は締め切りました。

小林研一郎×宮田大×読売日本交響楽団

■ 7/9 (土) 15:00 かつしかシンフォニーヒルズ モーツァルトホール

指揮：小林研一郎

チェロ：宮田 大

ドヴォルザーク／チェロ協奏曲

ブラームス／交響曲 第2番

[料金] SS ¥5,800 S ¥5,000 A ¥3,500 バルコニー ¥2,500

[お問い合わせ] かつしかシンフォニーヒルズ 03-5670-2233

フェスタサマーミュージア KAWASAKI2016

■ 7/28 (木) 15:00 ミューザ川崎シンフォニーホール

指揮・編曲：ボブ佐久間、萩田光雄

指揮・ピアノ・編曲：前田憲男 (スペシャルゲスト)

ムーンライト・セレナーデ、茶色の小瓶、A列車で行こう、枯葉、
真珠の首飾り、パリの空の下、大きな古時計 ^{ほか}

※14:20～14:40 出演者によるプレトークもごさいます。

[料金] S ¥4,000 A ¥3,000 B ¥2,000

[お問い合わせ] ミューザ川崎シンフォニーホール 044-520-0200